

92歳の現役フォト記者が発刊「浅草いまむかし」

戦後の荒廃した東京をカメラをかついで庶民の暮らしや世相を取材して歩いたジャーナリストがフオトエッセイ「昭和のワシ、旅取材や釣り取材な

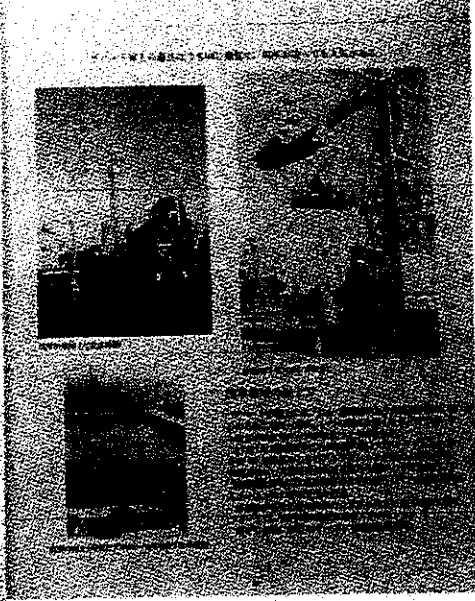
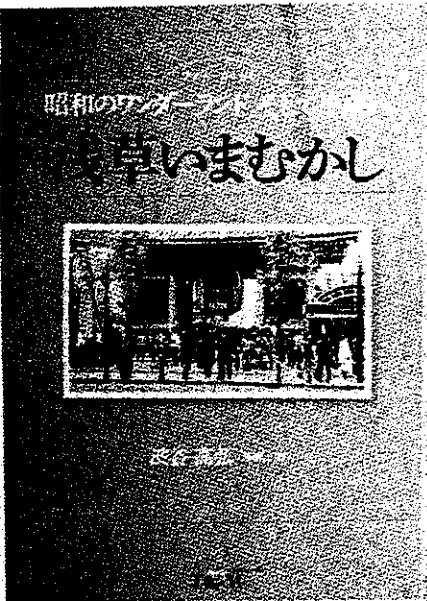
を刊行し話題となっている。著者は渋谷高弘、92歳の現役フォトジャーナリスト。日本大学芸術学部卒業後、新聞や雑誌のクラブ撮影で頭角を現し、旅取材や釣り取材な

とも行うマルチなジャーナリストとして活躍する。昭和20年代の浅草に通い続け、焼け跡から復興する行楽地の当時と現代の写真を比較しながら軽妙なタッチで70年間の変わり方を紹介している。「往時の浅草には何となく吸い込まれていくれそうな空気が漂っていた。人ごみ、お参り、におい、色彩など独特な雰囲気があり足が向いた」と巻頭で書いている。

作家の永井荷風先生とお会いしましたが、踊り子たちに囲まれ楽しそうでした」（渋谷）。演芸場では浅草のナンバーワンだった女優で座長の大江美智子、「フランス座」の若手芸人、渥美清やピータだけが注目された。昭和24年ごろには桜の木がなかった墨田公園の

土手も今はお花見の名所に。戦後70年を経ると趣が一変し、昔の食べ歩きが今は歩き食べに。江戸時代からのてんぷら、お寿司などはあまり売れない。すしや通りには寿司屋が3軒のみ。老舗の天井には行列が続いていると『今様浅草』を解説する。

著書はネットで購入できる。
（ジャーナリスト／中森 康友）



戦後まもない浅草寺境内は戦災で寺の面影がなくなき自転車を荷台に乗せた一台の焼き芋の屋台、板囲いの小屋に「人民理髪所」とすごみのある看板。朝から囲碁将棋で騒ぎを晴らす大人たち。そのそばで駆け回る子供たちの歓声。

繁華街の浅草上八区は映画館や演芸場が復活し、人気の「ロック座」の楽屋で取材中に「偶然に大